

「現代アート」という言葉の響きに抵抗を感じる読者も多いと思う。ショッキングだったり、政治的だったり、なんだかわからない作品だったり……。本来、アートは美しいと感じる絵画や彫刻だったはず。しかし、このアートの価値観をひっくり返す事件が起こってしまう。

今から100年以上前、美術館に日用品を持ち込んだ「現代アートの父」と呼ばれる人物がいる。フランス生まれのアーティスト、マルセル・デュシャンである。彼が展覧会に普通の変哲もない男性用の小便器にサインし

アートの始まりである。

この夏、ひっくり返るような東京の猛暑のなかで、「ひっくり返る」「セミ・レディメイド」とうわ言のように反芻していたら、素数の「エマーブ」が思い浮かんだ。たとえば37と73のように、素数の数字を逆にひっくり返しても別の素数となる数字だ。子供でも喜びそうな珍しい数字だ。

今年、アメリカではセミが大量発生し、数百年に一度の騒々しい鳴き声をたてたというニュースが流れた。13年ごとに羽化して大量発生する13年ゼミと17年ごと

## 数 | 理 | の | 窓

### ひっくり返るような暑さの下で



て、ひっくり返して置いただけの「作品」が物議をかました。作品なのか、作品ではないのかと喧々諤々の議論の末、展覧会ではほとんど展示されることなく、そして最後は紛失してしまうのだが、この事件を契機に、アートの価値観がひっくり返ったといわれる。

果たして便器は誰かが作った大量生産品だからアートではないと言い切れるのか。では、反対に「アートでないもの」とはなにかと彼は問いかけた。デュシャンは既製品を使った作品を「レディメイド」と名付けた。そして「レディメイド」に手を加えたものを「セミ・レディメイド」と呼んだ。デュシャンの登場以降、アートとはもはや美や精巧さを競うものではなく、「コンセプト」が重視される時代へと変貌していく。これが現代

の17年ゼミが同時に羽化したのである。この「素数ゼミ」と呼ばれる2種類のセミが同時に会うのが2024年であった。これは13と17の最小公倍数にあたる221年ぶりの事象である。ついでながら13も17もひっくり返るエマーブである。

そもそもエマーブ (EMIRP) という名前自体が、素数の英語のプライム (PRIME) をひっくり返したものである。金融の世界でプライムといえば、東京証券取引所が2022年に刷新した市場区分のプライム市場がある。ひっくり返るような出来事が起こる時代、プライムであり続けるためには価値観を転換させ続けることが必要なのかもしれない。そう、「セミ・レディメイド」のように。

(花崎 徹治)